

巻頭によせて



校長 北 村 聡

Kitamura Satoshi

明末の文人李卓吾（1527-1602）は故あって七日間食べ物にありつくことが出来ずようやく家主に食べさせてもらいました。あまりの美味に「いまのは米のご飯でしたか、なんでこんな美味しい米があるのですか」と問うたところ、今は米ではなく黍^{キビ}だったとのことでした。本当に飢えた者は、米も黍も選んではいけない、どちらも求めてやむことの出来ない貴重なものであるということです。李卓吾はこの体験から、「本当に道に飢えている者は孔子か老子かなど選んでは居られないのではないか」との示唆を受けたという話があります*。

「苦しみを乗り越えて行け」と励ますのは簡単です。本当に苦しんだ者に必要なものの一つが、偉人たちが残した様々な教えです。それらに触れ、心に力を得て、生き続けることです。それは仏教の教えであれ、キリスト教、孔孟、老荘のそれであれ、また哲学や文学であれ、人々が何かをきっかけとして学ぶことの出来たその人その人の心に響く先人の遺産です。

今日、経済優先、能率優先、成果主義が支配的となり、所謂「即戦力」が求められ、表面的な技能や知力が尊重される反面、文学や哲学、歴史、宗教といった、人の心の奥底に根を下ろし苦しみを抜いたときにこそ心の支えとなる根元のところが、ともすれば軽んぜられる傾向です。経済的な豊かさも大切ですが、人間が精神的な危機的状況に陥ったときに、とてつもない力を発揮するのがこれらの教養です。老若を問わず、こうしたものに出来る限り親しまねばなりません。

残念ながら、自分のことを100%理解してくれる人間は存在しません。そんなことを期待するから失望するのです。行き詰まって絶体絶命の時、周囲の無理解に落胆して絶望の底にいる時のために力になってくれる教えを、様々な著作の内々に求め続けたいと思います。

* 劉 岸偉 著『明末の文人李卓吾』1994年中央公論社